

“学びをひろげる わたしと〇人の会” 第 15 回研究会 (2016.3.12) 報告

浅田芳正さん「教育は教えないこと～考える力を育てる～」

◆浅田芳正さんが奈良日日新聞に 1 年関連載されていた教育コラム『教育は教えないこと！～考える力を育てる～』が、出版されました。(同題名・奈良日日新聞社発行) それを機会にこの「教育は教えないこと」という刺激的で、なかなか奥深い題名をテーマに、浅田さんの実践と教育思想を大いに語っていただきました。

自由交流は、浅田さんの教え子であり、著作の中にも感動的な物語の主人公として登場する所さんから、「教え子の目から見た浅田実践」を語っていただくことから始めました。

風呂敷登校や復習帳などの取り組みを懐かしく思い出しながら、浅田さんとの出会いを通して、教師になりたいとの夢を持ち、実際に養護学校高等部(奈良県では今も「養護学校」というそうです)の教師になったことなどを話してくださいました。

◆「教育は教えないこと」の浅田提案について、語り合いました。

Mさんは、大好きな碁になぞらえて、何も教えないと我流になる。碁では、「定石」を知ることが大切。「一を聞いて十を知る」というように、「一」を教えてあとは自ら学ぶものであると。

Tさんは、学生時代に家庭教師をしていた時に、生徒に何も教えないで、2時間学校の愚痴など、子どもがしゃべりたいことを聞き続けた。子どもが苦しんでいることを軽くしてあげれば、子どもは(成績も)伸びると。

Kさんは、東北大震災発生の2か月後に宮城県に支援ボランティアに行った時、とにかく手取り足取り支援する、手伝う意識しかなかったが、被災者はみんなごろんと横になったまま動かなかった。仲間と相談して、「タコ焼きをしよう」と話し、道具を調達してタコ焼きを作り始めると、子どもたちが起き上がって集まってきた。興味を持ったその親たち、まわりの大人たちもやってきて、自分たちでタコ焼きを焼いて食べ始めた。自然に友だちに会いたい、学校に行きたいなどの話が出てくるようになった。そのとき自分たちは道具を整えただけで、あとは後ろに下がって見ていただけだった。何かをやってあげよう、支援しようとするれば、相手が動かず、私たちが後ろに下がると、みんなが前に現れて動きが生まれてきたように思う。

Yさんは、ヘアーインディアンの話を出しながら、彼らには「教える」「指図する」という文化がない。「学校文化」とは異質な文化である、という話をされました。

◆参加者が一人ひとり「教えない」をキー・ワードに、様々な話を出して、意見を交流しましたが、浅田さんの著作の中で、私(松森)は以下のような言葉を興味深く読みました。

▼(日本に近代教育が導入された)当時は education と英語で呼ばれていた。しかし、明治政府は education を「教育」と翻訳し、各地で学校制度を整えた。…教育に「教」という漢字があるために、教えることが何より大切だと多くの教師は考えるようになった。…しかし、本来、education とは、「その人が持っている能力を引き出し開発すること」という意味である。「教えること」とは英語で teaching。日本人はどこかでこの二つの意味をはき違えたようだ。education を「教育」と翻訳したため、「教師は子どもを教える人」になってしまった。

▼(宮大工の世界を紹介しながら)法隆寺の木には、一つとして同じものはない。会社や学校にも一人として同じ人はいない。どの人も癖や個性がある。

それなのに、現在の建築会社では癖のある木を製材し均質化した角材を使用する。学校でも同

じである。誰かが勝手に基準を決めて、子どもを均質化しようとする。それは、教えようとする教師にとっては、効率的で都合がいいからである。

マニュアルをつくり、子どもをロボットのように扱う。偏差値は、その最たるものではないだろうか。今の学校は、会社や組織の管理者に都合のいい大人をつくるための手伝いをしているように思う。

▼多くの場合「教える側」と「教えられる側」とにはっきりと分かれている。そのことは、学校現場で特に顕著にみられる。教師は、自分の考えや知識を一方的に子どもたちに教えているのだ。

では、なぜ教師は子どもに教えたがるのだろうか。まず、考えられることは「子どもは何も知らない。だから教えてあげないと」という善意の考えである。教師は、子どもは何も知らないと決めつけている。それは間違いである。

子どもたちは育っていく中で、実に多くのことを学んできている。…

もう一つの理由は、教えた方がずっと楽だからである。教えないことは見守ることを意味する。子どもを見守る方がずっと時間がかかる。教師の我慢が必要となる。

しかし、子どもの発言を待てずに教師は、ついつい教えてしまう。子どもたちは、考えなくても黙っていれば、いつか教師が答えを教えてくれることを知っている。だから、ただ黙って待っている。その方が子どもにとっても楽である。…

▼法隆寺の棟梁西岡常一氏の内弟子小川三夫さんが、新聞のコラムに、「教えないのは学ぼうという雰囲気の中で放っておこうということだ」と書いていた。今の学校には、子どもたちに学ぼうとする雰囲気がない。だから、教師は教えざるを得ないのである。いや、実は、教えるから学ぼうとする雰囲気がなくなるといったほうがよいのではないか。

教師の最も大切な仕事は「子どもたちに学ぼうとする雰囲気」を育てることである。そして、「考えることが楽しい」と思う気持ちを育てることである。

私は話の面白さに引き込まれて、一気に読み通してしまいました。まだ読んだおられない方は、是非一読をお勧めします。

浅田芳正著 『教育は教えないこと！～考える力を育てる～』

奈良日日新聞社刊 1500円＋税